

平成29年度鳥取県西部地区中学校学びの共同体研究会実施レポート

期日 平成29年11月24日(金)

会場 境港市立第一中学校

◎ 研究テーマ 「学びの共同体」(協同的な学び)の理論と実践

◎ 指導助言者 学びの共同体スーパーバイザー(元東大阪市立金岡中学校長) 馬場 宏明 先生

1. 公開授業(9:55~11:45)および指導助言(11:55~12:55)

(1) 2年理科「天気の変化と大気の動き」

班を入れるのが早くて良かった。授業開始5分後にはグループ学習を始める。映像(動画)はわかりやすく良かった。共有課題は、寒冷前線と温暖前線の特徴を、教科書を読んで考えながらまとめ直すもので良かった。教科書本文の穴埋め(虫食い)プリントをさせる授業があるが、思考が伴わず、ただ見て写すだけになるので良くない。教科書から意味を読み取らせることが大事。頭を鍛えるようにする。グループ学習のとき、生徒は静かに取り組んでいたが、それは課題が考えさせるものであったため。課題がよいと、私語もしなくなる。教師がしゃべりまくる授業は、生徒にとっては退屈で、だんだんと教師の話を聞かなくなる。これが続くと、授業が始まると生徒はすぐにしゃべり出すようになる。

班学習の良さは、一緒に学ぶ生徒のがんばる姿を見て、「自分もがんばろう!」と思えるところにある。また、わからないときにはいつでも相談できる安心感がある。班学習で生徒たちがしゃべり出すのは課題ができたときや課題に飽きたときである。ザワザワする前に全体の6割程度ができたところで切り上げる。全員が終わるのを待ったり、時間で切ったりしない。

学級全体での発表は単なる答え合わせではなく、学級全員との対話である。「わかりましたか?」「質問ありませんか?」と聞くと、わかった子しか発言できない。拍手をしてしまうと質問もしづらくなる。「わからない人はいない?」と聞き、わからない子を全体の場に引っ張り出す。周辺の子も巻き込み、全員との対話になるようにする。教師は生徒の考えを引き出すファシリテーターの役割を担う。わかったことを説明させ直すと、生徒が本当に理解しているかどうか確認できる。

(2) 1年英語「Program 8 “Origami”」

ジャンプ課題は、辞書を使って調べて考えさせる授業だった。課題を出して考えさせるのがよい。わかっていることを繰り返しやるのは良くない。英語力を付けるのが授業だが、先生はテストの点を上げさせようとしている。教師は英語力があるのだが、それが生徒に理解できているか。読むだけの英語から話す英語へ。指示なども英語で行う。生徒はおとなしいが、賢いので教師を見抜いている。

「How」の使い方を3つ考えさせたのは良かった。生徒たちが食いついていた。班を指名して発表させていたが、人が考えた答えを発表していたので、その生徒がかわいそうだった。自分が考えたものではない答えを言うのは、うれしくも何ともないし、その生徒は理解していない。ただ答えを言っているだけ。指名するときは、班ではなく、個人に当てる。それも、ぎりぎりがんばって正解を出した生徒を指名する。全員に当てる必要はない。一人で十分。生徒の発表の後には、「わからない人はいますか?」と聞く。

各班にホワイトボードを1枚ずつ配って書かせていたが、基本的には個人に考えさせるので、ホワイトボードを配る必要はない。ホワイトボードを配ると、できる子が取ってしまい、その子が一人で考えて書いてしまいやすい。その子が間違っているでも誰も指摘できないし、わからない子は相談もできずに眺めているだけになる。全員にワークシートを配って、全員が考えられるようにする。班は考える場であって、答えを出す場ではない。

2. 研究授業(14:25~15:15)

1年理科「物質のすがたとその変化」(授業デザインは別紙)

授業参観の視点……「学びの共同体」(協同学習)の理論・方法を取り入れ、かかわり合い学び合う主体的な

活動を通して、「確かな学力と豊かな心を育み、みんなと生きる生徒の育成」をめざした
学習活動の展開

①生徒が主体的に学び、学習（教科）のねらいを達成する（確かな学力を育む）ための「学ぶ値打ちのある課題」となっているか。

- ・「共有の課題」（基礎・基本、知識・理解、技能）
- ・「ジャンプ課題」（応用・発展、技能、思考・判断・表現力）

②個々の生徒の学びや、生徒同士のかかわり合い学び合い（班・全体）が成立していたか。

- ・「共有の課題」における班活動（個人作業の協同化…わからないときに聞く）
- ・「ジャンプ課題」における班活動（他者の意見を聞き、自分の考えを深め広げる）
- ・全体学習（対面）……表現の共有（聴き合い、生徒の意見をつなぐ）

3. 研究協議および指導助言（15:30~17:00）

(1)開会あいさつ (2)授業者の自評 (3)グループ討議 (4)指導助言

今日は実験で4人グループを使っていたが、誰もが何らかの役割を担って活動していたので良かった。はじめからリーダーなどの役割を決めることがあるが、それは良くない。生徒の中に序列をつくってしまうことになる。学び合いは、民主的な関係をつくることで生まれる。グループ活動では、わからない子が中心である。「わからないから教えて」ということから学び合いが始まる。教師が「教えてあげて」などと言ってはいけない。教える人と教えられる人という上下関係をつくってしまうことになる。自分から「教えて」ということで心理的に強くなる。

理科の実験では、教師の説明だけで授業の半分近くを使うことがよくある。しかし今日は、プリントにやり方がすべて書いてあったので、生徒は自分たちで読んで実験をしていた。そうすることで自然と相談もできていた。課題の出し方を工夫することで学び合いが生まれる。ガスバーナーに火がつかない班があったが、先生は見ているだけで手を出さなかった。生徒に自力解決をさせていて良かった。また、どこからも「先生、先生」と呼ばないのがよい。試行錯誤はつきものだが、自分たちで考えようとしているのがよい。教師はあまり動き回らずに、教室全体を見渡すようにする。気になる班があっても、遠くから見ていて、何かあったときにだけ口を出す。

生徒を前に出させて説明させる意味を考える。それは発表者をどう育てるかということ。みんなにわかってもらえるように説明させる。先生に向かって答えを報告するのではない。そのためには、教師の立ち位置が大切。教室の横がよい。発表者の声を聞きながら、聞く生徒の顔を見る。生徒の説明が終わったら「わからない人はいませんか？」と尋ねる。生徒の顔を見て、「この子はあやしいな。」と思ったら指名してみる。元気のあるわからない子を指名するのがよい。落ちこぼしをつくらないようにする。生徒の説明が不十分な場合は、教師が補足説明するのではなく、教師が生徒に質問することで、教師が説明したいことを生徒に言わせる。教師の言葉よりも生徒の言葉のほうが、子どもたちにはわかりやすく、理解も深まる。生徒の完璧な説明に対して、教師は言い直しをしない。言い直しをすると、生徒がだんだん発表者の説明を聞かなくなってしまう。昔ながらの教師による1問1答形式の授業は、正しい授業のスタイルではない。教える授業から学びとらせる授業に転換を図る。

新しい学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」がキーワードになっているが、これは従来の一斉指導ではできない。課題に自分たちで取り組むことで「主体的」になり、グループ学習で学び合うことが「対話的」であり、ジャンプ課題で難しいレベルの高い課題に取り組むことで「深い学び」を実現できる。課題が簡単だと、できる子はすぐにやっちゃって遊び出してしまう。できない子はそれを見て、課題に取り組まずに遊ぶことをまねてしまう。逆にできる子ががんばれば、できない子はまねてがんばる。今日のジャンプ課題では、見事な学び合いが生まれた。生徒全員が考えていた。生徒が悩んでいるからといって、ヒントをあまり早く出さない。しっかりと考えさせることが大事。

生徒に力をつけることを主体とした授業づくりを行う。今の時代は、記憶力ではコンピュータに負ける。点数を取らせるだけの授業では、本当の学力（解決力、考察力、判断力、探究力など）はつかない。今の世の中は困難なことが増えている。自己解決力を身につけることが大切である。